

心の故郷に巡礼の旅をする人

岡田恵美子第八詩集『露地にはぐれて』によせて

鈴木比佐雄

1

宇都宮在住の岡田恵美子さんは、一九九〇年に地元で開かれた岡田さんの第四詩集『焰の唄』と高野未明・高橋昭行の合同詩集出版記念会で始めてお会いした。それが機縁となつて詩誌「コールサック」にも詩篇を寄稿してくれるようになった。岡田さんとは、互いの詩的情熱を確認しながら詩篇を受け留めていく関係を二十年も続けてきた。

今回、岡田恵美子さんの既刊の七冊の詩集を読んでいると、底知れぬ悲しみのようなものがあつて、そこから言葉が紡ぎだされてくる気がした。人間社会に対する深い絶望のようなものを感じながらも、人間への限りない愛へとつなげようとしている。岡田さんはクリスチャンのカトリック教徒でありながらも、私にはなぜか仏教の慈悲の心

そして 潮待ちの日々。

軌跡は

その時から永遠を

めぐりはじめたのだ。

タアレスよ。

アナクシマンドロスよ。

混迷の野に消える

朝霧よりも儂く

満たされぬ思いで

流砂の果をさまよひ

今 静かに

地に伏している私は

すでに年老いた

一頭のラクダにすぎない。

〔無限遠点〕の前半)

このような自分を砂漠の「一頭のラクダ」に喩えた詩は、まだ日本的な湿潤の風土が色濃く残つ

である「大悲」に転化されるような逆説を生きていると私には感じられてきた。岡田さんは旅が好きで世界の多くの国々を訪れている。そんな旅を通して岡田さん自らの内面の旅を続けているのかも知れない。詩篇を読み続けていると、私には岡田さんの旅を背後から見詰めているような錯覚を覚えた。

第一詩集『レスボスの馬』は一九六四年に三十三歳の時に刊行された。詩人としては決して早い第一詩集ではないが、自分のテーマを見すえた力作が並んでいる。その詩集の冒頭の詩「無限遠点」は、岡田さんの詩的精神が人間の思考の根源を辿ろうとする情熱に突き動かされていることが分かる。岡田さんは遥かに遠い無限の地点を臨んでこの詩を書き記そうとしていた。

無限遠点

愛情の歴史によれば

火の刻

風の時間

ていた一九六四年では珍しかったろう。人類の歴史を動かした思想・宗教と言われるものが、砂漠の地のような存在の危機を絶えず感じさせられる場所から発生したことに岡田さんは立ち帰ろうとしている。「タアレス」とは西洋哲学の開祖であるギリシャの哲学者タアレスのことだ。ミレトス学派を創設したタアレスは、星の観察に夢中になって井戸に落ちたと言われ、日食を予言した。タアレスは自然を説明する原理（アルケー）を探求し、それを水とした。タアレスによって神話的宇宙観が、科学的な自然哲学へとして転化されたと言われている。アナクシマンドロスはタアレスの弟子で、地図や星図を描き、日時計を発明したと言われている。万物の始源を「無限なもの」と考えた。岡田さんの詩は、そのようなギリシャ哲学の根本原理を辿りながら、そんな思索の歴史を「愛情の歴史」と受けとめて詩作の中に入れようとしていた。岡田さんは西洋哲学を遠い国のものとは思っていなかったのだらう。西洋哲学と言われている近代の物質と精神を峻別する二元論ではなく、「万物は神々に満ちている」という汎神論的な考えに

方に岡田さんは親近感を抱いていたのだろう。岡田さんがそんな東洋と西洋の境界が混沌とした人類共有の記憶である「愛情の歴史」として受け止めるには、自らをラクダにして語ることが多分必要だったのだろう。

戦意と究理を象眼された

私の額に

光かかげる星もなく

ましてや 憩いの時さえも

授かることはなかった。

私は

砂嵐に行き悩む旅人をおそい

その腕を

その眼球を 脳ずいを

コヨウテのようにむさぼり

秃鷹のようにどんらん

つつき回しながら なお

飢えの満たされることはなかった。

そうして

わずかばかりの認識を詰めこんだ。

永遠に解けぬ謎のように

うっとしいコブの重みに

しめつけられ

さいなまれ

砂漠のへりを蹠跟と

やって来たのだ。

私の得たものは

一掬の清水ではなかった。

不信に悶える

償いの日々。

野茨は胸壁を引裂いて咲き

砂漠の太陽は

傷つき流れる血潮の一滴までも

チリチリに枯れ上らせた。

なおも私はゆかねばならない

イスラエルへの巡礼の杖に

青き木の芽の芽ぶく日までを……。

#### 〔無限遠点〕の後半)

「二頭のラクダ」は激しい飢えによって人間を襲い貪り、その知恵を自らのものとしてコブの中に隠してしまう。しかしそれを実現しても虚しさが募り、「私の得たもの」は「償いの日々」だったが、そんな「コブの重み」である原罪を背負いながら岡田さんは、いつの日か「イスラエルへの巡礼」に向うことを心に秘めてこの詩は終わっている。第一詩集の冒頭からこのような硬質な詩篇を書き上げていた岡田さんは、きつと生存の危機を乗り越えるような精神的な経験を経てきたのだろう。「巡礼の杖」に木の芽が芽吹くという比喩が、最後に救済のように鮮やかに心に刻まれる詩として成立している。この詩「無限遠点」の課題を岡田さんは今も担って生きているように思われる。

この第一詩集には十一篇の詩が収録されている。詩集タイトルの詩「レスボスの馬」は、詩人サツポーの出身地として有名なレスボス島にいる「あばれ馬」のような存在が、自分の中にも存在していることを告白している詩だ。岡田さんは人間の

深層に眠る「あばれ馬」を目覚めさせ、そんな人間の赤裸々な精神世界を直視ながら生きようと願ったのだろう。

#### 2

第二詩集『海のドラマ』は十年後の一九七三年に刊行された。第一詩集と同様にその頃同人だった詩誌「龍」を主宰していた大滝清雄さんの「龍詩社」から発行されている。茨城県下館市で呉服商の長女として生まれた岡田さんが、初期の頃に詩的土壌としていたのは、この詩誌「龍」の大滝清雄さんなどの同人たちとの詩的な活動だったろう。この第二詩集『海のドラマ』は連作「海のドラマ」六篇とその他六編の十二篇から成り立っている。岡田さんはきつとギリシャ神話を愛読されていたのだろう。古代クノッソスやギリシャの神話のような人間の愛憎のドラマが岡田さんにとっては、架空のものではなく、現実の家族・親族の間の現在進行形のドラマと重ね合わされながら書き記されている。そのような詩を書かざるを得ないほど切迫したものが詩行から感じられた。最後

の詩「バベルの塔」を引用してみる。

### バベルの塔

裸身を抱く  
思想を息吹く  
手びねりの  
素焼の壺。

遠雷をきく  
腐った腸詰の  
屍臭をかぐ。

手慣れた  
パントマイム。

砂塵をくゆらし  
宙空に架る  
透明な月に  
鋭角に打ちこまれるくさび  
未来を飾り彫りした

花型の文字

人は  
したたり落ちて尚  
地に届かぬ つららのような  
虚しい祈りも知らず  
堕ちてゆくものの行方も知らず  
塔を積む  
煉瓦を焼く  
あらゆる言語――。  
あらゆる宗教――。  
あらゆる思想――。

の  
バベルの塔

その天への軌道に  
パスポートを買いこむ  
雲海を掻き分け  
誰よりも早く辿り着こうと。

その時  
ふいに彼は立ち上る  
膝にこぼれたパン屑を  
何げなく払うように  
眼疾を患っていた眼から  
霧がとり除かれたように。

花型の文字は  
幽暗をさして  
はらはらと散る。

はらはら  
はらはら――と。

この詩は、神に近づこうとする人間の文明の傲慢さを諷めるだけでなく、人間の文化の儂さを見詰め、そこに殉ずるような悲しみを秘めているように感じた。人間のあらゆる言語・宗教・思想は「バベルの塔」を目指してその過程で自壊していく宿命にあるのではないか。その虚しさを乗り越えるためにはどうしたらいいのか。

岡田さんの詩は、重たいテーマを真正面から問うていく硬質な詩なのだが、どこか救いへと繋がる経路が残されている。絶望から希望への架け橋を見つけることが、岡田さんにとつての最も重大なことだったからだろう。岡田さんの詩の魅力とは、そんな修羅場を潜り抜けた静かな海辺の光景を感じさせてくれることだ。

第三詩集『岡田恵美子詩集』（日本現代女流詩人叢書第99集）には、二十篇の詩が収録されている。注目されるのは連作「鬼を飼う」四篇だ。母との精神的な格闘を書き記したものが、子への愛情が希薄な母に対する痛切な思いをこの連作で吐き出すように伝えている。「あなたは鬼。／私もまた鬼。」と記す岡田さんの幼年時代の精神状況が、大人になり、クリスチャンに向わせた大きな要因だったことが分かる。精神的な格闘を孕んだ激しい詩だけでなく、岡田さんには次の「方舟Ⅱ」のような詩もある。

方舟Ⅱ

夕餉いるのもやに包まれて  
街は昨日と同じ灯を点けた  
帰り足を急がせる

父族

母族

子供族

集蛾燈に群がる羽虫のように

思い思いの

屋根のついたランプの中に

吸い込まれてゆく。

扉を閉すと

家々は夜の波に洗われる

方舟

きつちり外界と隔絶した中で

人はそれぞれの仮面を脱ぎ始める

勤勉な一日を勤め上げた

男の顔。

近隣との交際もつつがなく

仕了わせた平安な主婦の顔。

丹念に今日の顔をはずすと

灯りはひときわ人の影を濃くする。

かすれたような月の光りを

拒んで

それぞれのうちに倅せを満たしている

ように思う人人の

まどいと安泰を乗せた

数多くの方舟

その確信の軌道を

一筋の流星が

今 静かに牽いてゆくのを――。

一九八三年に刊行されたこの詩集によって、岡田さんは家族の様々な精神的な軋轢を多くの読者に届けられるように詩に昇華したのだと感じられた。「それぞれのうちに倅せを満たしている」方舟の存在が希望のように輝きを発している。

一九九〇年に刊行された第四詩集『焰の唄』では、夫の病氣入院や病氣になることによって見えしてきた人生の哀歎を記したものが多く、最後の詩に「独楽」という息子に捧げた詩がある。息子

でありながら一人の研究者として地道な研究をす

る生き方を誇りに思う清々しさが出ている詩だ。

自分が受けなかった母の愛を息子には自然に伝え

ようとしている。人間として当たり前のことを感じ

伝えることの素晴らしさを伝えている。

一九九五年に刊行された詩集『花暗』は、医師

から癌と告げられた夫に病名を伏せて接しながら

亡くなるまでのことを記した詩篇が中心になって

いる。その中に「花」と言う短い詩があるので引

用してみる。

花

花はいたみながら咲くのだろうか

咲くいたみと

散るいたみと

花の想いを引き受けて

木下闇に分け入れば

厚化粧した狂女のように

花々は唾う

花には花の感情があつて

花だけの言葉があつて

人目には静かに咲き

ひっそりと散っているように

見えるだけで

花にも修羅があるのだから

時ならぬ狂い咲きなど

花のあわれ

夢の無惨

流れに渦まく落花紋様

花は

小さな旅人となって

諸行無常を流れてゆく

「花にも修羅があるのだから」という詩行には死んでいった夫への思いが伝わってくるだけでなく、生きているものの宿命を受け入れていく「小さな旅人」である人間の在り方をも伝えてくれている。

第六詩集『十軒町界限』は岡田さんの生れた戦

前の下館市に実在した町を記したものでしょう。しかし決してノスタルジーとして美化するのではなく、その町で健気に生きていた一人ひとりの姿が存在の痛みのように描かれている。詩「風の太鼓」に出てくる戦死した「兄ちゃん」の祭りでは、太鼓叩く雄姿を思い出し、母ちゃんが「あの子は海の中で太鼓叩いているだよ」と涙を浮かべて語る場面はとても感動的だった。

3

第七詩集『白狐』は二〇〇二年に刊行され、二十七篇が収録されている。染織工芸家加藤千代氏の白狐から触発された詩から始まっている。岡田さんは実家が呉服商だったこともあり、まわりには染織工芸が満ち溢れていた環境だったので、鑑賞眼も確かなものがあるのだろう。この詩集には多くの工芸家、音楽家、陶芸家などの作品に寄り添いながら作者の内面に迫り、また岡田さん自身の内面のドラマを重ねながら書かれている。また旅の詩篇も多くなっていて、それは新詩集の巡礼の旅に繋がっていくように思われる。

新詩集『露地にはぐれて』は今まで試みてきた詩作の集大成とも言える詩集だ。五章に分かれ五十篇の詩が収められている。一章「露地にはぐれて」七篇は、中国・韓国への旅の詩だ。露地という言葉には露出した地面の意味の他に、仏教用語で煩惱を捨てた境地のような意味もある。また露地はその響きから町の路地へと転じていくのだろう。「はぐれて」という響きの中には、目的もなしに気のおもむくままにその場所を散策し、その場所で暮らす人々の素顔を見ようとする衝動のようなものが伝わってくる。また自分がその地に「まぎれて」生きてみたいという秘かな願望も感じられる。冒頭の詩「諸葛八卦村」では、孔明生誕地八卦村の沼で見かけた魚を洗う男を記す。詩「西施」では、国を滅ぼした美女西施を記した芭蕉の句を想起し「その後の西施はどうなったか」と呟く。詩「ソウルの朝」では、朝食前にホテルの窓から見かけたカトリック教会を訪ねて、「見知らぬ街の／見知らぬ教会の中で／ひたすら祈った」という。岡田さんは世界各地で頻発している天変地異の天災が「神の怒り」ではないように

祈ったという。その他の詩篇も韓国の歴史の悲劇を伝えている場所におもむいて、その時に感じたことを記している。

二章「聖ヨハネ教会廃墟にて」十篇は、岡田さんが長年抱いてきた巡礼の旅を記したものであったろう。冒頭の詩「開けゴマ」には、岡田さんの宗教観がさりげなく記されているので、引用してみる。

開けゴマ

開けゴマ

呪文を知ったアリババは  
盗賊の庫を開いて豊かに暮らした  
けれどそれは単に  
盗賊の上前をはねただけ  
それで幸せになれたのか  
アラビアンナイトは教えてくれない

私達も誕れる時  
神様から何かの呪文を授かってきた

そして開けるのだろうか  
叡知とか  
勇氣とか  
寛容とか  
一つ一つの宝の倉を

人生の倉は沢山あるので  
間違った所を開けてしまふ事もある  
殺戮とか  
虚偽とか  
悲哀の扉を

そんな時イエス様は  
何を用意して下さるだろう  
優しい慰めなど  
期待しない方がいい

犯した罪に苦しむだけ苦しみ  
その先に見えてきた僅かな光  
それに気付くのが幸せなのだ

闇の中を彷徨<sup>さまよ</sup>っても  
闇から脱<sup>だ</sup>け出<sup>で</sup>そうとあがく心  
それが救いなのだ  
自ら気付く事が愛なのだ  
うつつすらほほえまれて  
振り向いて下さるだろう

岡田さんはイエス様に「優しい慰めなど／期  
待しない方がいい」と語る。また苦しみの果て  
に「見えてきた僅かな光」が「幸せ」なのであり、  
彷徨いから抜け出そうとする「あがく心」が「救  
い」なのであり、そのようなことを「自ら気付く  
ことが愛なのだ」と淡々と自らの宗教心を伝えて  
くれている。最後の二行である「うつつすらほほえ  
まれて／振り向いて下さるだろう」に、私は神が  
宿っているような静かな感動を覚えた。岡田さん  
は詩「あのパンが食べたい」などのようにキリス  
ト教と宗教戦争を繰り広げたイスラムの地や聖書  
に記載された場所を訪れて、その地の民衆の素顔  
を直視して、どこか宗派を超えた寛容な宗教観を

見いだそうとして、詩作を続けているように私に  
は感じられた。

三章「夕日の聖母子像」十篇は、第一詩集で強  
い関心を抱いていたギリシャ・ローマを実際に訪  
れて記した詩篇だ。それゆえ観光というよりも岡  
田さんの心の故郷に巡礼の旅を続けているかのよ  
うに感じられた。岡田さんはすべての光景をあり  
のままに受け取っていき、二千年前の聖パウロの  
姿を重ねてもいる。岡田さんの祈りということは、  
そのような実践のあり方を意味しているのだら  
う。そう考えていくと第一詩集にあった「巡礼の  
杖」とは、杖に木の芽を芽吹かすように岡田さん  
の生涯をかけて試される宗教心のことだったのだ  
ろう。今の暮らしなどを記した四章「デイスタン  
ス」（距離）十二篇、掛け替えのない友人たちを  
鎮魂した詩篇などの五章「余剰のいのち」十一篇  
も岡田さんの全体像を魅力的に語ってくれている。  
宗教心を根底に抱えながら、露地や路地にまぎ  
れて懸命に生きている多くの人びとにこの詩集を  
読んでもらいたいと願っている。

岡田恵美子詩集『露地にはぐれて』栞解説文

鈴木比佐雄

コールサック社

2011